

伝統を新たに発展させる力

50回・51回講師 洲浜 昌三

高校生の多彩な舞台を、自由に観劇するだけなら、二日間は気楽で楽しい時間です。しかし、講師と肩書がつくと、義務や責任の重圧がのしかかってきます。

島根県大会は2日で7校の発表です。広島は13校。事前に13本脚本が届き、メモを取りながらじっくり読み、特徴や問題点などの寸評を用紙に書いておきます。時間がかかります。本番で観劇しながらメモするために事前に用紙を準備します。その用紙には次のような項目があります。舞台図、脚本、装置、音響、照明、衣装、出だし、発声、全体評価 等々。項目ごとに文章で評価を記入しますが、文の冒頭に、良いところは赤で◎や○、弱点や問題点は△印を付けておきます。

なぜこんなに細かなことをするのか。劇だけしっかり観て感じたことを述べればいいのではないか — ある時までそういう気持ちで臨んでいました。しかし、次々と劇を観て、幕間討論や、講評になると、すぐ劇が思い出せなかったり、混同したり、劇の良さや問題点を飛ばして講評したりする怖さを感じたのです。13校観劇体験からはじめた記憶再生記録活用策です。この記録を基に、大田市演劇サークル 劇研「空」のブログ、「詩の散歩道」「高校演劇」の項目に「第50回広島県高校演劇大会舞台評」を書き、写真入りで13校の舞台評を掲載しています。今でも読みに訪れる人がて、夏から秋にグラフが上がります。

2010年に尾道で開かれた50回も実りの多い大会でした。8本の創作中、顧問創作が5本脚色1本。それぞれ個性的で面白く、広島の顧問の先生方の熱意と力を再認識しました。ぼくも顧問の時は、ほぼ毎年創作しましたが、教育活動で多忙な教員が毎年一定水準以上の脚本を執筆することは並大抵のことではありません。大会当日にも追加修正削除もあり、部員の忍耐力や即戦応用力を鍛える結果になることもしばしばです。

この大会で、驚き、な一るほど、と納得したことがありました。独自の視点と緻密な舞台で注目していた沼田高の須崎先生が舟入へ、伊藤隆弘先生から引き継いだ舟入の原爆劇の伝統を守り発展させてこられた黒瀬先生が沼田へ！巨人・広島のエース交換です。元町・松本先生の文学の香りが漂う舞台、清水ヶ丘・岡田先生の暖かい人間関係が漂う舞台も懐かしかった。そして、県大会で一度も観たことがないので「あんた、本当に演劇の顧問をやっとるんかね」と言った、ぼくの毒入りの言葉を、「頑張っとるんですよ」と笑って受け流してくれた美鈴が丘の片山先生が、創作劇「野球小僧を知ってかい」で、音楽も使い、懐かしい昭和の少年野球の人間関係を楽しく、ほろ苦く描いて、独自の世界を舞台で繰り広げて見せてくれました。(舟入演劇部卒業生の実力を証明!) 鈴が峰女子の部員落合真奈美さんの創作「ばあちゃんと万華鏡」も重量感のある力作、尾道の劇も会場と一体感が生まれる素敵な舞台でした。審査は、沼田、鈴が峰、尾道、舟入で拮抗。苦しい選択でした。

51回大会(広島市東区民センター)でも生徒創作1、脚色1、顧問創作5、脚色1と、変わらず個性的な創作劇を楽しみました。審査では舟入と沼田が圧倒的に高く評価されました。特に舟入の「麦っこゲン」は中沢啓治の作品を顧問の須崎先生が脚色。工夫された舞台装置、無駄がなく、行動と同時進行する言葉、隙間のない迫力のある舞台に感心しました。輝かしい伝統があり、期待の目が注がれる舟入の演劇に新たな原爆劇が生まれた気がしました。ぼくが責任を果たしたように、ほっとして嬉しかったのを覚えています。